

## (7) アメリカ合衆国における障害学生支援のまとめ

今回の視察で、障害学生支援における高大連携の先進的事例を調査した結果、次のような点が特徴として挙げられた。

1. オーロニ大学 (Ohlone College), カリフォルニア州立大学ノースリッジ校 (California State University, Northridge), PEPNet - West のいずれも、聴覚障害のある高校生の移行支援サービスを行うために、高校の情報を持っている IEP コーディネーターあるいは SELPA の移行スペシャリスト (Transition Specialist) との連携が必要不可欠となっていること。
2. オーロニ大学のろう教育学部 (Center for Deaf Studies) で行われている Deaf Preparation Program (DPP: 入学準備プログラム) で、聴覚障害学生にとって自身の学力が低くても“現在”から“将来”へ移行する選択肢が得られるように様々なプログラムを提供していること。
3. PEPNet - West では、聴覚障害のある高校生が自立や大学生活に適應できるように Web コンテンツを充実させたり、教育やろうコミュニティ関係の集まりに参加したり自らカンファレンスを開催することで、本人、家族及び学校や関係者に対する啓発活動を積極的に行っていること。
4. カリフォルニア州立フリーモント聾学校 (California School for the Deaf, Fremont) やマールトン学校 (Marlton School, Los Angeles) で、①高校 2 年の頃から大学や職場への移行を考慮してカウンセリングやトレーニングのプログラムを実施する、②高校卒業後も数年間は継続して英語の読み書きや数学の学習支援、自立支援などフォローアップ支援や地域との繋がりでの支援を行う、の 2 点が取り込まれていること。しかも、前者の聾学校では、教育省とリハビリテーション省との提携による移行パートナーシッププログラム (TPP) と就職準備プログラム (WRP) で聾学校を“拠点地”とし、高校生や卒業生が自立や移行ができるよう手厚く支援していることは大変興味深かった。
5. ロサンゼルスろうコミュニティセンター (Greater Los Angeles Agency on Deafness) では、聴覚障害のある高校生を持つ親とネットワークを作り、親が子どもの自立や移行を支えるキー・パーソンとなるようにワークショップや情報提供を行っていること。

以上の特徴は、聴覚障害だけでなく、他の障害領域に関しても同様に必要な事柄であると思われる。事実、学習障害のある学生が 165 名いるオーロニ大学でも、障害学生プログラム及びサービス部門 (DSPS) が、DPP のように学習障害を対象にした入学準備プログラムを作りたいとのことであった。

また、大学内の障害学生支援だけでなく、今回の高大連携における障害学生支援においても、障害者教育法（Individuals with Disabilities Education Act）と ADA（Americans with Disabilities Act）による法的整備が今回の取組の実現につながっていることを再認識させられた。

1つは、今回の視察で見られた PEPNet の体制移行のように、ADA の制定によって障害学生への差別をなくし、教育にアクセス権利を保障するための支援体制を構築してきた大学が、高校以下の教育機関にノウハウとツールを提供し、聴覚障害のある高校生の移行ニーズに幅広く対応していくことを重視する段階に至っていること。

もう1つは、IEP が 1984 年から実施されており、移行サービスも取り入れることで、教育から職業リハビリテーションへの連続した個別計画に基づくサービスが実現されたこと。これに VR カウンセリングやキャリアカウンセリングなど様々な分野のカウンセリングサービスも関わって支援していること。

以上のことから、日本において障害学生支援における高大連携を行うためには、次のような条件が必要になるのではないかとということが示唆された。①高校から大学等高等教育機関への移行支援に関する法的整備がなされていること。②障害学生支援の実績を持ち、支援のノウハウやツールを発信できる拠点校としての大学があること。③障害学生のニーズに応じて、大学入試に合格できる学力かつ大学への移行スキルを習得する準備プログラムが行われること。④聾学校や高等学校において早い段階から卒業後の進路に向けたプラン設計の支援や情報提供が行われること。

最後に、大学における障害学生支援とは、「大学在籍中に支援する」のではなく、「大学進学を考える時点から大学を卒業して仕事が決まる時点までの間に必要な支援をどれほど行うことができるのか」という問いを持ってもっと取り組んでいかなければならないのではないかと、まさに視点の転換を迫られていると感じた。

なお、視察の実施にあたって、フリーモント聾学校職員の岩田真有美さん、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校教員の小林洋子さん、サンタクララ大学大学院の岡田孝和さんらには多大なるご支援をいただいた。末尾ながらここに心から感謝の意を表したい。